

軍上陸後は戦況不利で、十八日ドンニイ地区に後退。

この地区は四季を通じて水の湧くサイパン唯一ともいえる水源地があり、病院も岩山に囲まれ、真ん中に沢が流れ、洞窟が病室になり、約三千名の傷病兵が十分な治療も受けられないまま暮らしていた。

ある洞窟で長瀬氏は衛生兵として看護に従事しており、高山弁の氏の会話を耳にした兄は「お前はどこの生まれか」との問いが切っ掛けで同郷だと判明したと言われる。

洞窟内で三〜四日行動を共にしたが、長瀬氏は後方転戦を命ぜられ、別れの時に兄は抗戦不能の傷病兵全員に手榴弾を渡し、「自決後に後を追う」と語ったと言われた。

後日、ドンニイ地区は米軍の物量にものを言わせた攻撃で壊滅的打撃を受け、この地区が兄の最期の地であつただろうと涙ながらに説明されました。

ドンニイの洞窟は、入口近辺は密林のため昼なお暗く、洞窟内は三十余年の歳月で土砂くずれも著しく、奥行き二〇メートル、幅一〇メートルくらいの大きさ

でした。

砂の上に遺影写真を立て、高山からの水、みたらし団子、みかんなどを供えて霊を慰め、洞窟内の石灰岩石数個を遺骨の代わりとして拾いました』と書かれている。

サイパン島では昭和二十八年から昭和五十四年まで、十回にわたり政府派遺団による遺骨収集が行われ、二一、三六六体と報告されている。五十年経った今日でも、ジャングルの中、タガンタガン灌木の下にまだ無数の骨が眠っていると想像されるという。

昭南憲兵隊

C級戦犯として

愛媛県 豊田隆淳

私の家は、周桑郡丹原町湯谷口の高野山真言宗安楽寺で、私は五十三代目の僧侶です。大正十四年八月九日、八人兄弟の末っ子ですが長男として生まれました。

高野山へ修業に行き、旧制中学校五年卒業して帰るとすぐ兵隊です。

二十歳入営ですが、兵隊検査は第二乙種、十九歳の人と一緒にでした。昭和十九年九月、丸龜の部隊に入隊一カ月いて、南方要員として門司出港。七隻の船団で昭南島への途中、台湾沖で空襲を受け、我々の船を含め三隻のみ昭南島（シンガポール）へ着きましたが、他は沈没してしまいました。航行の途中水葬をしたり、病院で葬儀もしましたが、私は僧侶なので、その都度式に参列していたのです。

タイへ行きましたが、泰緬鉄道が爆破されて通れない。タイで初年兵教育をしましたが、はや十九年も年末となっています。私は学校教練の検定に合格していましたが、馬來の共産党がはびこり治安が悪化してきましたので、急遽憲兵学校へ入れという命令がきました。第七方面軍、南方軍の憲兵教修隊はクアラランプールにあり、三カ月間の短期教育で、昭和二十年四月一日、憲兵上等兵に進級、昭南憲兵隊本部付きとして配属されました。警務課に入り内勤で、逃亡兵や共産党

の聴取調査を作ったりしていました。次に外勤となり、飛行場や停車場、市内巡察とやらされます。下士官が長で、その配下となり手伝いをするのですが、補助憲兵ではなく正規の憲兵なのです。

八月十四日、終戦の詔書をもらうまで、馬來の共産党検査をしました。英・蘭の混血（ハッカス）と華僑、馬來人も一部を捕らえて取り調べる。この取調べは厳し過ぎました。

婦女子が三人で別荘を構えているのを調べて見たら、火光交信をしていたり、無線で通信をしていました。無線機を押収したりしましたが、その女性は二十代の者で、まさかと思うような者が、まさかと思うようなスパイ行為をしていました。

これらの女性スパイによって命取りになることもあるのです。昭和十九年ころになると、朝鮮人軍属で私立大学を出た人たちが、独立運動を起こしていましたし、こちらの情報が随分敵地や現地共産党に流れていました。昭南の憲兵隊本部だけで、一一〇人ぐらいの憲兵がおり、軍人軍属ばかりでなく、一般市民や邦人

現地人などの情報も調べていました。

私は新米の上等兵ですので、下士官の下で手伝いをし、何も分らず勤務していたのです。それで、私ら憲兵隊の情報も、憲兵隊での取調べの方法が、後に婦女虐待や取締りそのものが違反であるなどと、戦犯にかかわる問題が出てきたのです。

憲兵は、八月十四日から九月三日まで、全員昭南島に集まって、市内の治安維持の任務に当たっていました。他の部隊は山の方へ引き揚げ集結していました。我々は治安維持といって兵器は持っていても弾はなし、一応外見のみを見せて取締りをするのです。そのため、唾をかけられたり、罵声を浴びたりしましたが、抵抗することは禁じられ、本当に阿呆らしいものです。

九月三日、英軍の先遣隊が上陸するとき、印度人が自動小銃を持って警備していました。私たちは憲兵の姿のままでしたが、そのときは民衆は抵抗しませんでした。

英軍の上陸が終了すると同時に、憲兵は憲兵隊の庭に集められ、全員武装解除され、チャンギー刑務所へ

連れていかれ、全員が一人ずつ独房に入れられました。情報が交換されたり、情報が漏れることを防ぐためであったようです。

それから取調べが始まりました。一口はパン二枚、サーズン（いわし）一枚だけ、水だけは飲めたが、それで厳しく取り調べる。独房の中は水洗便所あり、オーブンである。その水が飲み水ともなり、食器洗い用にもなるのですから、脚気にもなるし下痢もする。一月耐え忍んだが、下士官はそこへ残され本格的な取調べをされました。

事件に直接かわり、陣頭指揮をした者は全部死刑と聞きました。将校や上層部は内地へ送還され取り調べられました。えん罪の人もいたでしょう。首実験でこの人だと言われればそれだけで罪人になって、戦犯で裁かれる。言い訳は聞かれぬ一方的な裁判だったといえます。

私たちは労役に服させられる。日本兵でも指揮官でもその作業隊へ入れられ、二カ月くらいの労役の間に現地人などや共産党員で調べられた人たちが首実験に

来る。それが恐ろしい。間違えられたらという不安がある。むしろ、刑が決まった刑務所の方が良かったと思います。華僑の中には日本人を恨んでいる者が多く、占領時の反動が敗戦の時に現れ、敵をとられたのでしよう。

労役は埠頭の荷揚げ作業とか、クレーンで船から揚げた物を二輪車に積んで運んだりする。監視の目が厳しく、食物も十分でないから、周囲の通路に隠れ場所を作り、そこで内緒に食事をしたりし栄養失調になるのを逃れていました。

一カ所の作業隊は二百人くらい、私は港の入口シンガポール、ケッペル作業隊でした。民衆の首実験は恐ろしいので、作業隊慰安の楽団に入って仮装して、現地人には分からないようにしたこともあります。日本人は検問を抜けるために案外うまくやっていました。

それらの作業は二十年の末まで続きました。

その後、二十一年には、シンガポールの山の中のウッドランド作業隊に入られました。ゴム林の伐採や宅地の造成の土方工事。罰を与えるためか、だんだん厳

しい仕事をさせるのでした。夜、椰子の木の下で星空を眺めて、いつ帰れるのかと思ったりの毎日でした。

警備はオランダ人が多かった。キャンプは白いキャンパスの天幕でした。食糧は昭和二十二年の初めころから、内地から来た米と味噌が主体となりました。これで、やっと体の調子が整えられるようになりました。その前は栄養失調、マラリアや Dengue 熱、脚気などで多くの人が死にました。

作業隊の編成が代わったり、作業内容が変わったりさせたのは平均化していくためであったようです。しかし、我々憲兵はしょっちゅう目を付けられて、厳しくされていました。そのうち日本語の通訳がキャンプにいるようになり、意見具申もできるようになりました。その点は紳士的なところもあり、逐次楽になりました。

昭和二十二年三月、第三次内地送還の船が来た。第四次の船に憲兵十一人を内地にかえずというので喜んでいたところ、決定寸前、憲兵隊は乗船停止の命令がきました。我々は地団太踏んで涙を流しながらキャン

プへ帰りました。

四月二十八日、本物の内地送還の命令がきました。英軍の二百人が交代で内地へ行く便に便乗することになり、憲兵十一人と一般の他部隊百人が乗船できました。準客船で、シンガポールから八日間の船旅で宇品港へ着き、検疫をし、復員完結したのは昭和二十二年五月七日で、そこで初めて予備役編入となりました。

我々憲兵は職務上、馬來共產党を取り締まったり、防謀のため取締りもし、また治安維持に任じたりしていました。勝てば勝った国の裁判で裁かれ、弁護士もない判決に従わねばならなかったが、我々のことが戦後タイプライターに打ち込まれていたように、それを証拠に戦犯となったのでしようが、あちらの立場での情報が打ち込まれていたわけでした。

戦後の労役は、報復労働が半分で、次には一般労働となったのですが、下士官は次から次へと絞首刑になったと聞きます。シンガポールのC級戦犯裁判で闇から闇へと葬られた人もいます。

私の取締官は印度の高等弁務官だという中尉で、そ

の人が仏教信者であったので、私が僧侶と知って輪袈裟と念珠は持たせてくれました。これは、御釈迦様のお陰でした。弁務官は日本語が良くできた人で、そのために作業隊へ回され寛大な措置をしてもらいました。今から十年前と十三年前、私は印度の弁務官をコンボで捜したのですが見付けることができませんでした。去年、シンガポールに行きましたら、当時の憲兵隊跡は公園となっていました。内地へ帰って、昭南憲兵隊の人と二〜三人は連絡がとれました。

労苦体験記

富山県 荒木長市

トラック島より生還しての思い出

私は昭和十六年三月、富山第六十九連隊に現役として入隊、三カ月第一期の検閲を終えて、下十候を志願、連隊の試験にどうにか合格し、第九師団の集合教育が始まる。任官まで一年九カ月間、金石廠舎にて、富山、